＜中学生の部＞

最　優　秀

「サッカーを通じて開いた海外へのとびら」

甲府市立南西中学校１年　櫻井 秀都

自分の国の常識が、他の国でも常識とは限らない。国際理解には、まずその国の文化と触れ合うことが一番だと思う。僕の通っているサッカークラブでは、ボランティア活動に力を入れ、普段利用する駅の掃除をしたり、試合会場となった場所のゴミ拾いを行ったりもする。そのため、韓国遠征に行ったとき、プロチームの試合観戦で子ども達が食べた物を次々と落としている姿を見て、とても驚いた。ゴミを拾おうとしたら、落とせと合図をされた。韓国ではそれが当たり前で、ゴミを掃除する人の仕事を奪ってしまうと、その人の仕事がなくなって収入を得られなくなってしまうらしい。ゴミを拾うのも、立派な仕事として成り立っていることは、少し衝撃的な事実だった。こういうことは現地に行かなければ分からないことで逆に日本は仕事に困っている人が少ないんだなということも、実感できた。韓国のグラウンドにもゴミが落ちていた。サッカーを愛する子ども達の見本にならなければと僕達はスタッフとゴミを拾った。小学校６年生で行ったカタール遠征では、ハーフタイムに同学年の選手達が全員で祈りをささげていた。マレーシアのチームは、ピッチに入る前にみんな体を清める動作をしていた。海外ではそれぞれ宗教があることは知っていたが、まの当たりにすると、正直自分とのギャップをとても感じた。子どもの頃からここまで徹底しているのかと、そこまで強く信じているものが自分にはあるだろうかと思うと、すごいなあと思った。同時に、これが文化の違いなのかなとも思った。

驚いたことは他にもあった。日本から１３時間かけて着いたカタールは、本当に暑かった。暑いのに汗が出ない、焼けつくような暑さ。それなのに、建物の中は冷房がききすぎていて寒い。こんな中でサッカーなんてできるんだろうか？これがアウェイでプレーすることなのかと、少し緊張した。でも、カタールでは午前中と夜はナイターで練習や試合が行われ、実はなかなか快適だった。ホテルは豪華だし、グラウンドはプロ選手が使うようなきれいに整った芝で、

スプリンクラーが回り、施設も設備も完璧なほど整っていた。サッカーが盛んで強いイメージがなかったから、これはすごく意外だった。さすが石油王国なんだなあと思い、石油が出るって本当にすごいことだと心から思った。

国際交流には、まず言葉の壁がある。一番それを感じたのは、同い年の中国人選手たちがサッカーの試合で来日し、わが家へホームステイに来たときだった。英語ならなんとなくでもわかるのに、中国語となるとハードルは高い。相手も全く日本語ができず、片言の英語すらあやしかった。でも一緒にサッカーしたり、トランプをしたりするうちに、距離がグンと縮まり、自然に意思を伝えられるようになっていたから不思議だ。

「足が速いね」「足が速いからモーターっていうあだ名なんだ」「寮生活をしてるから、１年に何回かしか両親に会えない」「お兄ちゃんも同じ寮なんだ」こんな会話を果たして何語でしたか覚えていない。気づいたら、携帯アプリも使わずにお風呂で１時間以上話していた。言葉のハードルは、思ったより案外低かったと感じる。それはぼくらがサッカーでつながっていたからだと思う。スポーツを通じて海外交流をしたことがある人にしかわからない何かがあるのだと思う。

昔、テレビで中国人が日本車を壊したり、日本人の店のガラスを割ったりしている映像を見たことから、ぼくの中国へのイメージはかなり悪かった。でも、彼らとサッカーをして、一緒にね泊まりした３日の間に、ぼくたちは心の友といえるほどの仲になった。細かいことは話さなくても、共にグラウンドで汗を流し、日中混合チームでの試合では同じゴールを目指し、喜んだり悔しがったりはげまし合ったりした。くだらないトランプでムキになって、大笑いして、食たくを囲んで布団を並べてねた。言葉より、一緒に過ごす時間こそが真の国際交流につながると思う。

次に彼らと会うときには、お互いにもっともっとビッグになって、今よりずっと素晴らしい舞台にいたい。そのために今、中学生のぼくがこの日本でできること、やるべきことをていねいに努力しようと思う。

もし、サッカーをしていなかったら行けなかった国にも行ったし、会わなかっただろう海外の選手とも交流できた。日本と海外の違いも感じたし、逆に同じだと感じることもあった。

スポーツの力はすごい。サッカーがぼくの海外へのとびらを開いてくれた。将来は、プロサッカー選手になって、日本の子供たちのためにぼくが世界のとびらを開いてあげたいと思う。